



おはなし

不思議な栗

小野直

「僕ついて行けないんだよ。次郎さん待つてね、次郎さん。」

次郎さんは面白がつて、太郎さんと一しよに、走つて行きました。

「太郎さん、次郎さん」

と、あとからのぼつてゆきました。

小さいお山の上まで来た時には、太郎さんと次郎さんとは、すっかりいぢわるな子供になつてしまひました。

「三郎さんを、おひてきぼりにしやう」

「二人でかくれやうよ」

太郎さんと、次郎さんと、三郎さんと、三人でお山にあそびに行きました。三郎さんは小さいので、太郎さんや、次郎さんが、ずん／＼登りますと、一しよに行けずにおくれてしまひました。

「待つて、待つて、太郎さん」

と、いひますと、太郎さんは前よりもつと早くいそいでお山をのぼります。

それから、太郎さんと次郎さんが山の向に走つて行くと、三郎さんも一生懸命に走つて、ついて行きました。それで歩いてきぼりにする事が出来ませんでした。

太郎さんと次郎さんが、木のかげにかくれると、三郎さんはすぐさがしだしました。

それで、迷子にすることも出来ませんでした。太郎さんが、きれいな花を摘むと、次郎さんもきれいな花を摘みました。三郎さんもきれいな花をつみました。

太郎さんがお山の上を走りますと、次郎さんも走りました。三郎さんも走りました。

太郎さんも、次郎さんもうけない子ですから、三郎さんを何とかして泣かせやうとしました。

◇……

太郎さんは、お山にひびき渡るやうな大きい聲で、「つまらないなア」といひました。それが谷に

ア……とひびきますと、次郎さんが、すぐ眞似をして、負けぬ氣で「つまらないなア」と、聲限りいひました。すると向から「つまらない……?」と響て來ました。太郎さんと次郎さんは一しよになつて「つまらないなアあ」といひますと、「つまらないかい」と響いて來ます。

大きい聲を出せば、ほど、向からはつきり綺麗な聲がして來ます。たうとう、太郎さんと、次郎さんと、三郎さんは、一しよになつて、聲のする方に話かけました。

三人「あーい。誰だあーい」

「あーい。誰だあーい」

三人は顔を見合せて、驚きもし、面白いとも思ひました。

太「誰だらう。男だね」

次「男だね。どこかのおぢさんだね」

太「さうだ。何してゐるんだらう」

次「何してゐるんだらうね」

三人「あーい。何か……頂戴」

「あーい。あーい。何でもさうから」

三郎「太郎さん。あれは、どこかのおぢいさんの聲

だよ」

三人「あーい。何か頂戴」

「あーい」

見る間に、おぢいさんが一人、草を分けて道もない坂を昇つて來ました。白い髪の毛をたおぢいさんでした。

「お前たちか、何かほしいといったのは。私について來なさい」

太郎さんと、次郎さんと、三郎さんとは、おぢいさんのあとをずん／＼ついて行きますと、いつの間にか、立派なお家に着きました。その家のうちの庫に入りますと、その庫には、美事な栗が、山のやうに積んでありました。

太「おぢいさん、澤山頂戴ね」

次「僕にも、澤山ね」

三郎さんは、おぢいさんの呉れるのを待つてゐました。

おぢいさんは、三人に三つづつ、大きい栗を渡しました。

「さあ、この栗を大事に待つてお歸んなさい。皆、おなじ大きさで、皆、おなじほどふしぎな栗なんだよ。それで、おぢいさんがあげた栗だけを大切に持つておかへんなさい。外の栗をまぜてはいけないよ。道に落ちてゐる栗をひろつてはいけません。私のあげた栗だけだよ」

と、いひきかせました。

太郎さんは、「さう、大丈夫だ」と、お禮もいはずに、そのまゝ馳け出しました。次郎さんも、僕だつて分つてる。太郎さん、待つて」といひながら、走り出しました。

三郎さんは、「おぢいさん、ありがたう」

とお禮をいひました。おぢいさんは、はじめてに
つこり笑ひました。

「さようなら。ほしくなつたら、またおいでな
さう」

三郎さんは、一人あとに残されたので、大聲で
「太郎さん」「次郎さん」と、今にも泣出しさうな
聲で呼び乍ら山をかけて下りました。

太郎さんと、次郎さんは、途中で栗の木の下を
とほる時、おぢいさんとの約束は思ひ出しはしま
したが、「誰も見てゐないから、拾つても大丈夫だ
僕、たつた三つ位ぢやたりやしな。おぢいさん
はけちんぼうだな。あんなに澤山あるのにたつた
三つくれた」といひながら、そこらの栗をポケッ
ト一杯ひろました。次郎さんも、太郎さんの眞似
をしてひろつてゐるうち、おぢいさんとしたお約
束をすっかり忘れてしまひました。それで拾つた

栗は、ポケットとハンカチと一杯になりました。

三郎さんは、大きな栗はいくつも／＼見はしま
したが、約束を守つて、拾ふ事はやめて、太郎さ
んと、次郎さんと一しよになつて歸つて來ました。

太郎さんは、この澤山の栗を、兄さんに見せま
した。兄さんは、どれがふしぎな栗か見分がつき
ません、又どれにも／＼虫が入つてゐましたので
「なんだこんなつまらぬ栗を、だまされたんだよ」
といつて、川に捨ててしまひました。次郎さんは
お家にもつて歸るとお母さんに上りました。お母さ
んは一つ一つ氣をつけて見ましたが、どの栗から
も、これぞといふ不思議も出さうにありませんで
した。その上、どれも／＼一つか二つ穴があつて
虫が頭を出してゐましたので

「次郎さんのおもちゃになさい。食べるわけには
ゆきません」

と、申しましたので、次郎さんは、すっかり二階

の窓から、庭にゐるボチや、クロや、小犬にその栗を投げました。ボチと、クロと、小犬とは、一つづつ、あの不思議な栗をさがして、うまさうにいつまでもく〜ぺちや〜となめてゐました。次郎さんは、今更乍ら惜くなりましたが、ボチやクロや、小犬は持つてにげてしまつて返して呉れませんでした。

三郎さんは、あの栗を、父さんと、お母さんと三郎さんと一つづつたべました。いくらたべてもいくらたべても、おいしい栗はまたもとの大きさにになりました。

そののち何度も、栗がほしくなつて、太郎さんと次郎さんとは三郎さんは邪魔だからといつてつれずに、栗をくれたあのお山のおぢいさんを尋ねて山中をさがしました。が、あの不思議な栗は一つだつてもらへませんでした。終

——昭和五年六月中旬——

ボンポコ狸の

ボンポコボン

お山の奥の穴には、狸のお母さんと、狸の赤坊が住んでゐました。ここには、狸のさらひな獵師も、狸のさらひな犬も来ませんから、夜になるとお母さんと赤ちゃん、お腹をふくらますと大きな太鼓をこしらへて

「さあ、坊や、お母さんと一しよにうたうよね」

母狸「それ、ポーン〜、ボンポコボン」

小狸「ポーン〜、ボンポコボン」

母狸「ポーン、ポーン、ボンポコボン」

お月様が上からそれを見ていらつしやつて、ニコ〜と笑ひました。お母さん狸と、赤ちゃん狸は、お辭儀をビョコンとして二ひき一しよに、前より元氣よく